

## 業績説明書

候補者名：原田和弘 所属機関名：神戸大学大学院人間発達環境学研究所

86.※**Harada, K.**, Masumoto, K., & Okada, S. (2025). Physical activity components that determine daily life satisfaction among older adults: An intensive longitudinal diary study. *International Journal of Behavioral Medicine*, 32(5), 717–727. <https://doi.org/10.1007/s12529-024-10273-7>

運動・身体活動の実践は高齢者の生活満足度の向上に寄与することが、多くの先行研究で検証されてきた。しかし運動・身体活動を構成する多様な要素のうち、どの要素が生活満足度の向上に寄与しているのかはよく分かっていないのが現状であった。そこで本研究では、高齢者の1日の生活満足度は、運動・身体活動のどの要素によって規定されるのかを検証した。神戸市灘区在住高齢者へ7日間の日誌・加速度計調査を行い、データを分析した結果、中強度以上の運動を普段よりも長く実践すること、午後の身体活動を普段よりも長く実践すること、および、普段または他の人よりも運動を楽しむことが、1日の生活満足度を規定することが明らかとなった。

80.※**Harada, K.**, Masumoto, K., & Okada, S. (2024). Between- and within-couple concordance for health behaviors among Japanese older married couples: Examining the moderating role of working time. *International Journal of Behavioral Medicine*, 31(2), 215–228. <https://doi.org/10.1007/s12529-023-10174-1>

高齢者の健康行動は、夫婦のような緊密な社会関係内で相互に影響すると考えられているが、この相互影響が生じる機序の解明は進んでいない。そこで本研究では、高齢夫婦において健康行動（食行動、運動行動、TV視聴行動）は相互影響しているのかと、仕事時間が短いほどこの相互影響が強いのかを検証した。神戸市灘区在住高齢者への3時点（事前、1年後、3年後）の縦断調査のデータのうち、夫婦揃ったものを分析した結果、食行動と運動行動については、仕事時間によって、配偶者の影響の強さに有意な違いはなかった。一方で、TV視聴行動については、仕事時間が短いほど、夫の同行動に対する妻の同行動の影響が強いことが明らかとなった。

77.※**Harada, K.**, Masumoto, K., & Okada, S. (2023). Does future time perspective moderate associations of instrumental and affective attitude with exercise behavior? A three-wave longitudinal survey among Japanese older adults. *The Journals of Gerontology. Series B, Psychological Sciences and Social Sciences*, 78(11), 1843–1853. <https://doi.org/10.1093/geronb/gbad115>

欧米圏発の主要な老年心理学理論である社会情動的選択性理論では、未来展望が広い者は目標達成を重視する一方、未来展望が狭い者は今の感情面を重視するとされているが、運動行動への適用例は限られていた。本研究では、日本人高齢者を対象に、未来展望の程度によって、運動への手段的態度および感情的態度と運動行動との関連性が異なるのかを検証した。神戸市灘区在住高齢者への3時点（事前、1年後、3年後）の縦断調査のデータを分析した結果、未来展望の程度によらず、運動への手段的態度でなく感情的態度が、運動行動と関連していた。この結果は、同理論と相反する結果であり、同理論の多文化圏への適用性を検討する必要性を示唆している。

68.※**Harada, K.**, Masumoto, K., Katagiri, K., Fukuzawa, A., Touyama, M., Sonoda, D., Chogahara, M., Kondo, N., & Okada, S. (2021). Three-year effects of neighborhood social network intervention on mental and physical health of older adults. *Aging & Mental Health*, 25(12), 2235–2245. <https://doi.org/10.1080/13607863.2020.1839858>

高齢期の社会的ネットワークに注目した従来の知見の大半は観察研究に止まるため、因果関係の実

証性や現場への還元性などに限界を含むものであった。そこで本研究では、地域行事へ参加を促す地域介入を行うことで、社会的ネットワークが向上し、その帰結として、高齢者の生きがい感や健康へ好影響するのかを検証した。神戸市灘区鶴甲地区をフィールドとした事前調査の後、大学の資源を活かした地域行事を平均月1~2回程度、計3年間、開催した。その後、3年後調査を行った。検証の結果、健康への好影響は確認されなかったものの、同行事へ参加することで社会的ネットワークが向上し、生きがい感の低下を抑制できることが明らかとなった。

52. ※**Harada, K.**, Lee, S., Lee, S., Bae, S., Anan, Y., Harada, K., & Shimada, H. (2018). Distance from public transportation and physical activity in Japanese older adults: The moderating role of driving status. *Health Psychology*, 37(4), 355–363. <https://doi.org/10.1037/hea0000583>

従来の研究では、公共交通の利便性が高いことは高齢者の身体活動に好影響すると考えられてきた。しかし、この影響の強さは、自動車を運転する者としいない者とで異なる可能性がある。そこで本研究では、最寄公共交通までの距離と高齢者の身体活動との関連性は、自動車の運転状況によって異なるのかを検証した。名古屋市緑区在住高齢者を対象に、最寄公共交通までの距離と1日の平均歩数・身体活動時間を測定した。分析の結果、自動車を運転する場合は、この距離が短い者ほど、1日の歩数・身体活動時間が多い傾向にある反面、自動車を運転する場合は、この距離が長い者ほど、1日の歩数・身体活動時間が多い傾向にあることが明らかとなった。